

田澤耕 著

『リアルとバルサ 怨念と確執のルーツ：スペイン・サッカー興亡史』

(中央公論新社、2013年)

評者 安田 圭史

近年、日本で非常に人気の高いスペインのプロサッカーリーグ、リーガ・エスパニョーラの二大勢力といえば、首都マドリードを拠点とするリアル・マドリード(以下リアル)とカタルーニャ州の州都、バルセロナをホームタウンとするFCバルセロナ(以下バルサ)である。著者は、今まで永遠のライバルとされ、「怨念」や「確執」を生みだしてきたリアルとバルサの関係が、日本ではプロ野球という巨人と阪神のような関係だと少なからず例えられてきた事実を挙げ、それが間違いであると指摘する。それは、リアルとバルサが「異民族」のチームであるからだという(19ページ)。確かにスペインは、16世紀前半にそれまで別々の国家が統一されるかたちで成立した。実際、両チームが拠点を置くマドリードとバルセロナは、元々「カスティーリャ」と「カタルーニャ」という異なる王国の都市であり、言語も現在に至るまでそれぞれ「カスティーリャ語」と「カタルーニャ語」という王国由来の言語が話されている。

ただ、カスティーリャ語はスペイン国家統一後の歴史の中で「スペイン語」として「共通語」となった一方で、カタルーニャ語は今日主にカタルーニャ地方でしか話されていない、「地方言語」となるに至った。またカタルーニャ語は、スペイン史の中で弾圧の対象となったことがあり、フランコ独裁政権期(1939年～1975年)には、カタルーニャ語を使用することは禁止され、「カスティーリャ語＝スペイン語」を話すことが強制された。近年カタルーニャ州では、独立に向けた動きが表面化しているが、それにはマドリードの中央集権体制に対して、カタルーニャ人が「異言語」を話す「異民族」であるため独立国家となるべきという主張が頻繁に繰り返されている。

一方で本書の特徴のひとつとなっているのが、ジュアン・アントニ・サマランク(1920年～2010年)の存在に着目しているところである。サマランクは、日本では国際オリンピック委員会(IOC)委員長を20年以上も務めたフア

ン・アントニオ・サマランク(委員長在任期間：1980年～2001年)として知られている。バルセロナ生まれのサマランクは、若い頃からファシスト党のファランへに所属しており、内戦(1936年～1939年)においてもフランコ将軍が指揮する反乱軍側を支持した。本書には、ファシスト式敬礼をするサマランクの写真も掲載されている(169ページ)。反乱軍が内戦に勝利し、フランコ独裁体制が築かれると、政権のスポーツ行政を主導し、1966年から1970年まで国民スポーツ局長の座に就いた。

しかし、著者はサマランクがカタルーニャをないがしろにしていたわけではないと論じている(172ページ)。それは、フランコの死後、国際オリンピック委員会委員長の時に、スペインで初めてのオリンピックであるバルセロナオリンピック(1992年開催)を招致したからである。著者によると、サマランクの力でオリンピックをマドリードで開催することも十分可能であったが、故郷カタルーニャに対する愛着が人一倍強かった彼はそれをバルセロナで実現させたという(174ページ)。開会式では、スペイン国旗、バルセロナ市旗に並んで、「カタルーニャ国旗」が掲揚され、サマランクは、「カタルーニャ語」でスピーチを行った。

そして現在、スペインは未曾有の経済危機の中にある一方で、マドリードでの2020年オリンピック開催をイスタンブール、東京と争っている。マドリードが悲願のオリンピック開催を模索している間、バルセロナではオリンピック開催からすでに20年以上を経て、人々の目下の関心事は、カタルーニャ州の独立問題となっている。マドリードとバルセロナが同じ「国家」に属しながら、足並みが揃わないこの現状に、リアルとバルサの間に見られるような「怨念」や「確執」が深く関わっていることは間違いない。

やすだ けいし

(龍谷大学経済学部専任講師・スペイン現代史、
イスパニア語学科2000年度卒業)